言語景観に関する社会言語学的アプローチと今後の課題

尹　亭仁／彭　国躍

本研究グループの今年度の韓国語関連の研究活動は、数年間集めた調査資料に今年度の調査資料（京都・福岡・熊本など）を加え、分類・分析を行なった。1千枚以上の資料から日本の言語景観にみる表記上の不一致を含む様々な問題と韓国語教育への示唆点が得られた。とりわけ、日本語と韓国語の漢語との対応に注目し、「韓国語の言語景観と活用の可能性（1）―韓国語の漢語語彙力の向上の観点から―」というタイトルで論文を執筆し、『神奈川大学言語研究』43号に投稿した。図1と図2のように、「正の転移」を生かす方法での取組みである。文法理解の向上については稿を改めて取り上げるつもりである。

論文で取り上げた授業での取組みの1つである「同じ漢字をグルーピングして提示する」を心がけ、後期の韓国語の授業で実践を試みている。

今年度の中国語関連の言語景観の研究は、主に次の4つのテーマに関するデータの収集に努めている。

（1）「19世紀以前の絵画に描かれた都市言語景観」

（2）「百年前の中国各地の言語景観の共時的横断研究」

（3）「20世紀百年間の上海言語景観の通時的追跡研究」

（4）「横浜中華街の形成に関する文献調査、図像収集」。

以上の資料調査が一段落すると、年月をかけて整理、分析し、順次論文化する。

図1　観光案内所（横浜駅）

図2　無料と利用（羽田空港）